

っては何らかの意味で「他なる」ものであることは言うまでもない。したがって、自然法がどのような意味で普遍的なのかという問いに答えるには、自然法そのものに関する議論(第九四問)を見るだけでは不十分であり、それに関係する人間の法と旧約の律法とどのように結びついているのかを見なければならぬのである(同じく神法である「新法」すなわち「福音の法」については別の議論が必要であろうが)。

そこでここでは、次の順序で考察を進めることにしたい。

(一) 最初に、アキナスの法一般の本質的特徴づけを紹介し、法論全体の構造の中での自然法の位置づけを確認する。

(二) 次に、人間の法が自然法からどのようにして導き出されるのかを、自然法が含む命令内容の異なったレベルの区別を考慮しながら分析する。その場合に注目すべきは、自然法そのものが可変性や多様性を持つていとされることが、いったいどのような事態なのかということになる。

(三) さらに、旧約の律法が含まれている三種類の規定、すなわち「道徳的規定 (praecepta moralia)」、「祭儀的規定 (p. caeremonialia)」、「司法的規定 (p. judicialia)」が自然法とどのように関係しているとアキナスがみなしているのかを検討する。

以上のような検討を経て得られる見通しは、次のようなものとなる。アキナスは、自然法が人間の理性的本性に基礎を持つており、その本性が普遍性と不変性を持つことを確信している。その限りにおいて、彼は自然法の「もつとも一般的な規定」の普遍性と不変性を主張する。しかし、このことはけっし

て自然法全体の超歴史性や超文化性を意味してはいない。すなわち、あくまで自然法に含まれることが認められる規定の内容であつても、人間が現実におかれている社会的・文化的状況に応じた可変性を持つてことをアキナスは柔軟に承認している。人間の本性は「人間の」ものであるかぎり普遍的であると言えるにしても、それは相当に「薄い」普遍性なのである。逆の方向から言うならば、その徳論が明確に示しているのと同じように、法論においても、トマス・アキナスは人間の理性的本性の可塑性を「厚く」見る自然法論者なのである。それゆえに、そのような人間の自然本性に依拠する自然法は、既にそこにある対象というより、「発見すべき法」と呼ぶべきものなのである。

一四世紀ビザンツにおける理性と宗教問題

——キドニスの試み——

橋川裕之

本報告の主題は、ディミトリオス・キドニス (Demetrios Kydonos) という名のビザンツ人の、挑戦的あるいは挑発的ともいべき試みである。彼は一三二四年頃、ビザンツ帝国第二の都市テサロニキに生まれ、同地で教育を受けた後、ヨアンニス六世カンタクジノス(一三四七―一五四年)、ヨアンニス五世パレオロゴス(一三三九―一四二五年)、マヌイル二世パレオロゴス(一三九一―一四二五年)の三名の皇帝に仕え、一三九七年頃、外交使節の任務を終えてイタリアからビザンツへ戻る途

中、クレタ島で死去した。

キドニスは一四世紀の半ばから終わりにかけて、在俗の学者として、皇帝の側近的政治家として、さらには、ラテン語を母語同然に駆使する外交官として精力的に活動し、その生涯における試みは多岐にわたるが、今日の学界においてひととき重視されているのは、彼の翻訳の試みである。彼は一四世紀ビザンツの屈指の翻訳家であり、ビザンツ史全体を通じてもっとも重要な翻訳家の一人ともいえるであろう。彼は、トマス・アクィナスのラテン語の神学著作をギリシャ語に訳し、それによってスコラ学の方法と思想をビザンツに輸入・紹介した、最初のビザンツ人であった。キドニスが最初に訳したのは、トマスの『対異教徒大全』である。彼はその後、『神学大全』の第一部と第二部、『信仰の諸根拠について』と『信仰箇条と教会の秘跡について』を訳した。彼はトマスの著作以外にも、カンタベリーのアンセルムス、ヒッポのアウグスティヌス、ルスベのフルゲンティウス、アキテーヌのプロスペル、フェカンのヨハンネス、ポワティエのペトルス、モンテ・クローチェのリコルドゥスなどの著作も訳しており、その翻訳の一覧は、彼のトマスへの傾倒のみならず、ローマカトリック教会の神学的伝統そのものへの関心をも示す。

ギリシャ語を母語とするビザンツの正教徒キドニスが、ラテン語を習得し、多数のラテン語神学著作を翻訳したのはなぜなのか。キドニスにとってトマス・アクィナスの神学はいかなる意味を持ったのか。彼の翻訳の試みはいかにして可能となり、それはいかなる反響をビザンツ社会に引き起こしたのか。興味

深いことに、キドニス自身がこれらの問いに答えるテキストを残している。それは一三六三年頃に書かれた、『弁明』と呼ばれる自伝的テキストである。キドニスがそこで強調するのは、長年シスマの状態にあるビザンツ教会とローマ教会の合同の必要性と、教理と慣習の相違をめぐって生じた論争における理性的議論の必要性と、ビザンツのギリシャ人が強固な民族中心主義と知的保守性を反省・脱却し、ラテン人による理性的探究の意義を積極的に理解する必要性である。彼がいうには、彼がラテン語習得を志したのは、首都宮廷における嘆願受付の職務をより円滑に行うためであった。彼はコンスタンティノープルに滞在するドミニコ会士のもとでラテン語学習を開始し、ある段階で、彼からトマスの『対異教徒大全』を手渡された。「それは神学の領野で、その問題にかかわる当時のすべての人を凌駕する男の著作であった。今日、トマスを知らない者はまったくいないし、その著作の膨大さにより、その思想の崇高さにより、そして、すべてに行き渡るその三段論法の力により、彼はヘラクレスの柱の外に住む人々にも有名である」。キドニスは一人のドミニコ会士との接触を通じて、ラテン語を習得し、トマスの著作に感動し、その翻訳を開始した。キドニスがトマスとビザンツの神学者を比較し、前者をより高く評価していることは明らかであり、実際、彼の活動はビザンツ社会において強い反響を引き起こしたが、彼は自らの活動がギリシャ人とラテン人の信仰の融和および教会の合同に寄与することを確信していた。彼にとっては、理性的探究と揺るぎない信仰を調和させるトマスの試みこそが、両民族の平和の土台となるべきものであった。